

書評

小河 孝 著『満洲における軍馬の鼻疽と関東軍』

文理閣、2020年3月刊 2200円＋税

刈田 啓史郎 KARITA Keishiro

Book Review

“The glanders of a military horse in Manchuria and Unit 100 of the Kwantung Army”
written by OGAWA Takashi

この書の内容は、大きく二つに分かれている。前編（第1章から第4章）は、軍馬の病気である鼻疽についての詳細な解説である。また後編（第5章から第8章）は731部隊と同じく、細菌戦のための研究と人体実験を行ったことで知られている100部隊についてである。ただ、これは別個の独立した内容ではなく、鼻疽という馬の疾患が、当時日本が作りあげた傀儡の満洲国の地で多発し、その対策としてつくられた奉天獣疫研究所（1925年南満州鉄道会社によって開設、以下獣研と略す）の技術が後に長春の100部隊の中でとり入れられ、その100部隊が細菌戦のための施設に変貌していく、その様子が本書で鮮やかに描かれている。

書評の執筆の最中に、世界はワクチンも治療薬もない「新型コロナウイルス感染症」の蔓延のニュースで持ちきりとなっていた。今年の夏に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックは延期となった。また、大阪で予定された戦医研の研究会、総会も開催できず、幹事会がライン会議で何とか役割を果たすはめとなった。その時を同じくして、当時ワクチンも治療薬もなかった「鼻疽」に関する著作の書評を書く羽目になった。予想もしなかった展開である。

まずこの書では、日本には存在しない人畜共通伝染病（主として馬の疾患）である「鼻疽」という病気について、当時満洲で、鼻疽研究の中心的役割を担っていた獣研の研究科長である山際三郎氏の講演を紹介している（第1、2章）。**秘**

「鼻疽は鼻疽菌による細菌性疾患で、第一次世界大戦で、馬の間で驚くべき発生をした。当時、フランスの軍馬の11.2%が鼻疽で斃れた。ところが欧州では厳重な予防策を施したため、現在は全くない状態である」。一方、獣研での鼻疽診断法の改良の積み重ねにより、鼻疽検疫をおこなって、満洲の地での鼻疽多発の状態を調べたことを述べて

いる。ただ著者は、獣研での研究課題の中に「予防と治療法」に関する報告が全くなかったことを指摘し、可能な予防対策の不備があったのではないかと疑念している。著者はまた、この鼻疽について、現在までワクチン、抗血清はなく感染動物は行政手続きにより殺処分されると述べている。ただ現在では治療に抗生物質があるとのことである。

またこの書では、鼻疽菌を扱う研究者の実験室感染についても紹介している（第3章）。満洲の地で、危険を伴う鼻疽感染実験がおこなわれ、そのもつて3名の研究者が鼻疽に感染し死亡したことが書かれている。注目すべきことは、著者は、危険を伴う強毒株の感染実験が強要される状況があったのではないかと疑念を述べている。それは、感染により死亡した研究者に対して、英霊と祭り上げが行われたことから、「お国のために危険を伴う実験もあえて行って成果を上げよう」という考えで、研究者を縛るような環境があったのではないかと推測している。

この書では、獣研が行ってきた鼻疽の実態調査について、その結果を、数字を挙げて書かれており、それが臨時病馬収容所、さらに軍馬防疫廠（100部隊）へと展開していった過程が述べられている（第4章）。さらに、関東軍主導による馬疫研究処の設立（1937年）の経緯が述べられている。この施設は、獣研の鼻疽研究部門を長春に移譲してつくられたもので、初代所長は生粋の軍人の安達誠太郎であった（第5章）。この安達が、戦後になって撫順戦犯管理所に収容され、そこでの供述書から100部隊での細菌戦研究活動を支援したことが述べられている。支援の中には馬疫研究所から100部隊への菌株の提供があった（第6章）。最後に、三友一男のハバロフスク裁判での証言を基にして、100部隊の組織内容（第7章）、やそこで行われた細菌戦作戦や人体実験について述べている（第8

連絡先： 〒933-0824 仙台市宮城野区鶴ヶ谷7丁目17-3

Address: 7-17-3 Tsurugaya, Miyagino, Sendai, 983-0824, Japan

Tel: 022-251-8889, Fax: 022-251-8056

E-mail: Keishiro.Karita@mc2.seikyuu.ne.jp

章)。

ところで、この書の「はじめに」のところに、次のような文章がある。それは 731 部隊長であった石井四郎が、獣研の研究者を 731 部隊に来るよう働きかけたことを示す以下のような内容である。

「731 部隊創設の石井四郎隊長は、創設時からしばしば獣疫研究所を訪れ、当時世界で只一人といわれた鼻疽研究室主任の割愛方を『三顧の礼』ならず、『五顧の礼』をもって招請した。温厚な所長は断り切れず、『本人の意思に委ねる』のであった。結果として当該研究官は断りぬき、不発に終わった。人間関係専門の『731 部隊』が人畜共通伝染病で我が国、否、世界で唯一の『鼻疽』研究専門家を熱心に招くことが当初から疑問であったことが大きな要因であったし、编者（著者の友人で獣研の研究者、編纂した資料を著者に送った。評者加筆）らも決して応諾しないよう希望したことも事実である。戦後本人を含めて『あのとき断りぬいてよかった』『そうでなければ完全に戦犯にされた・・・』と語るのである」

この文章の持つ意味は重大である。ここで分かることは、人権無視の当時の軍政下においても、招請を断ることが、本人の意思でできたことを物語っている。731 部隊に当時の内地の大学から多くの研究者が招請されたが、断ったという研究者のことはよく知られていない。本人の固い意思によるものとはいえ、結果は上司の違いによるものと推測される。細菌戦研究に加担し、731 部隊の人事に積極的に協力した医学部教授と、協力に消極的であった獣研所長の違いである。731 部隊で非人道的な凍傷実験を行っていた吉村寿人が戦後、「軍からの要請を断れるような状況ではなかった」と抗弁していたことはつとに有名であるが、検証の必要がありそうである。

なお著者は、石井四郎による働きかけの具体的内容はよくわからないものの、おそらく人畜共通感染症である鼻疽のヒトにたいする毒力に注目し、鼻疽研究者を 731 部隊の細菌戦研究に参画させる意図だったのではないかと推測している。

最後になるが、評者が 100 部隊についての小論（本誌 8 巻 1 号）を書いたとき、その末尾に次のようなことを述べた。

「731 部隊での活動を主として推し進めていたのが軍医であったのに反し、100 部隊の活動の中心的役割を担ったのは獣医師であったというのが特徴である。それを考えると、日本の医学者・医師の「15 年戦争」への加担とその責任を考えると、獣医学者・獣医師の組織としての獣医師界、また 100 部隊へ研究者を供給した国内の関連諸大学の役割についても考えていく必要がある」

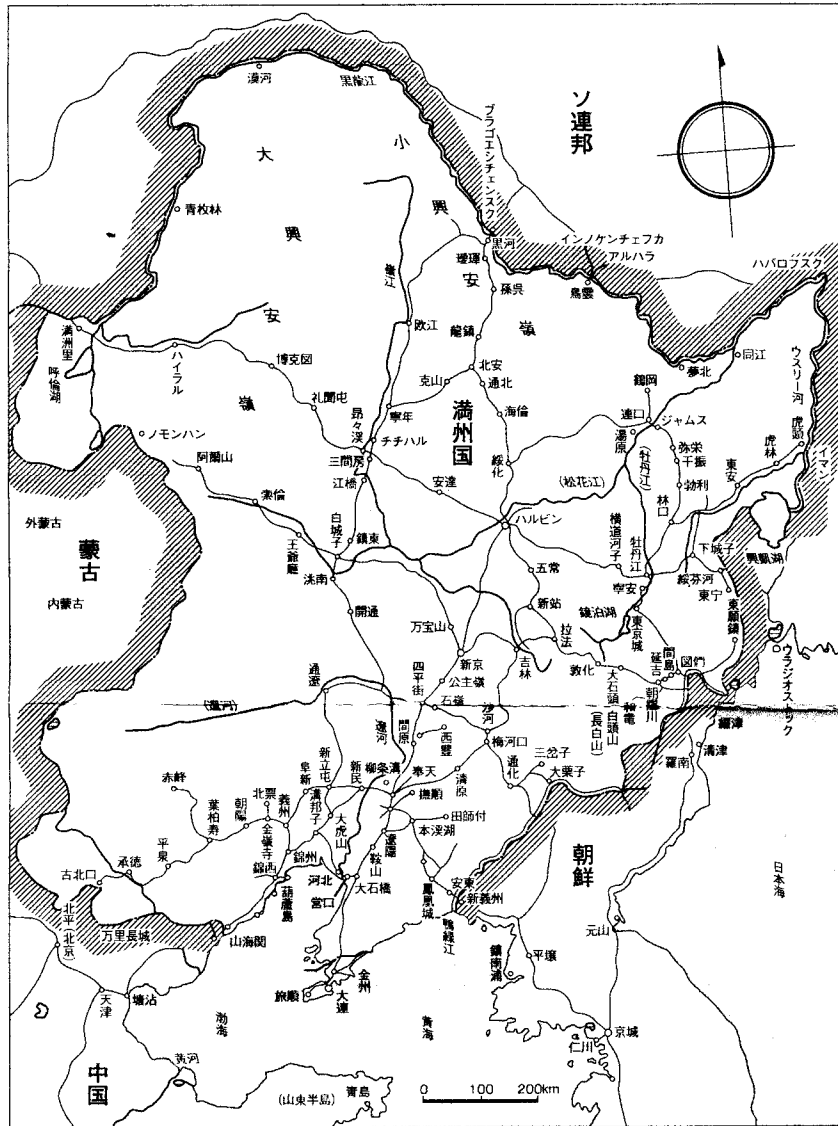
ここで私が求めたのは、獣医師界からの、100 部隊が行っていた細菌戦や人体実験についての検証であった。したがってこの冊子は、私が願っていたことへの回答ともいえるものである。心からの謝意を表したい。

評者プロフィール

刈田 啓史郎（かりた けいしろう）

1938 年秋田市生まれ、元東北大学教授、東北大学医学部卒、15 年戦争と日本の医学医療研究会幹事長、著書に『戦争と医学』、みやぎ憲法九条の会、2010 年、『NO MORE 731 日本軍細菌戦部隊』共著、文理閣、2015 年、『戦争・731 と大学・医科大学』共著、文理閣、2016 年、など。

旧・満州国全図 (1941年頃)



(『統・回想奉天獣研 20年』10ページ)

正誤表: 「山際三郎」⇒「山極三郎」